

分割されざる「個人」幻想への挑戦：岩明均『寄生獣』の皮膚感覚

稲賀繁美

民族浄化(ethnic cleansing)は、1989年のベルリンの壁崩壊に続くポスト・コロニアルな世界状況下で、我々を呪縛する強迫観念(obsession)となってきた。かつて支配的だった、西欧自由社会と東欧社会主義との二分法(dichotomy)は80年代には退潮し、代わってこれに劣らず図式的で虚構じみた別の対立、すなわち「聖なるイスラーム(Holy Islam)」によるテロリズムと、世俗化されたアメリカの「悪の帝国(Evil Empire)」との対立に置き換えられた。サムエル・P.ハンチントンの唱えた、西欧文明とイスラーム・儒教文明コネクションとの衝突の危機が近い将来起こり得る、との仮説は、ワシントンの政治決定者たちに無視できない影響力を及ぼしている。そのかん、民族の純粋性(ethnic purity)を、純粋性のために追求する傾向が、多民族性(multiple ethnicity)の軛の外でヘゲモニーを確立しようとする、多くの政治指導者の日程表(agenda)に昇り始めた(なお、お断りすれば、本論文の執筆は1997年前半である)。

岩明均の『寄生獣(The Parasite Beast)』(講談社)(fig.1)は1995年に完成したが、これは日本の現代社会がかかえる隠されたクセノフォビア(Xenophobia)に関して、深い洞察を示すマンガ作品であり、また広範な文芸批評家や社会学者から高く評価された。日本の知識人がなおコミックを学術的には軽視する傾向が強いなかで、鶴見俊輔はかれの73年の人生のなかでこれほど

彼を捕らえた本は、ほかに一冊しかなかった、と告白した(それよりはるかに若い世代で、大澤真幸も発言している)。いったいどうしてこの作品は、かくも熱狂をもって迎えられたのか。虚構の寄生動物は、どうして今日の倫理的な問題の虚(blind spot)を突くうえで、有効(relevant)なものだったのか。この作品が、コミック特有の映像に頼って強調した皮膚感覚に注目しながら、以下こうした疑問に答えてゆきたい。

1

ある夜、テニス・ボールほどの大きさの未知の地球外生物(extra-terrestrial creature)が突然地球に幾つとなく落下し始める。孵化した卵からは、頭にドリルのついた蛇のような虫が現われる。その本能に導かれるまま、それらは近くで眠っている人間の頭のなかへと潜り込む。それらのほとんどは、うまい具合に宿主の脳を乗っ取って、それを朝までに内部から食べ尽くしてしまい、それらの体が、宿主の頭部そのものに置き換わってしまう。並外れた柔軟性(elasticity)に溢れた体のおかげで、それらは宿主の顔の特徴をたくみに模倣する。こうして宿主に変装することで、それらは表向き宿主のアイデンティティーを維持しているように振る舞う。しかし元来の脳はもはやどこにも残ってはおらず、いうまでもなく、宿主その人のアイデンティティーなど、もはや失われて取り返しがつかない。宿主の体はいまやそれを乗っ取ったよそ者の占拠者(alien occupant)の支配下に入っている。

次の朝から、あちこちで凄惨な人殺し事件が発生しはじめる。寄生獣たちが、自分の身近にいる人間たちを、食料として摂取し始めたからだ。妻や子供が突然、自分の夫であり父だと思っていた存在から攻撃されてしまう。まだ人類は、明確にはこの侵略(invasion)の事実を察知していなかったが、何千というまがい物の人類(fake human-beings)が突如地上に出現していた。マス・メディアでは恐るべきミンチ・殺人事件が報道され始める。

さて、ここに、そもそもの侵略プログラムの達成を阻む、ある事件が発生する。一匹の虫は、ある少年の頭部への侵入しようとしたところ、少年はなにかむず痒いのに気づいて目覚め、自分の顔めがけて飛びかかってきた虫を右手でくい止める。そのため虫はその目的地に



fig. 1 岩明均『寄生獣』第1巻扉、講談社、1995年

到達しそこない、頭脳を奪うかわりに、少年の右腕のなかに侵入することで自足することを余儀なくされる。朝までには、虫は宿主の少年の右腕に置き換わってしまう。だがこれは寄生生物にとっては「失敗作」であった。というのも、この宇宙生物は少年の頭脳を誘拐し損なったからだ。もちろん宿主の少年は、自分の腕を「食べちまった」と語る寄生獣にたいして怒りをあらわにし、この、もはや彼には属さない自分(?)の右腕を殺そうとする。だがうまくはゆかない。右腕の皮膚は、今やおそろしく柔軟性に富み、自由自在に変形できるので、怪物は難無く少年が攻撃のために用いたナイフを攔んで、わけなく、へし折ってしまう。

少年のこの自分の(?)右手にたいする混乱した反応は、現代の外科医療行為で、疑問に付されることのないままでいる、ある深い曖昧さを明るみにだす。一方で、この寄生生物に、悪性新生物の比喩を見ることは容易だろう。現代の外科手術は、こうした異常増殖する悪性腫瘍を切除(eliminate)することによって成り立っている。ところが、大規模な切断(amputation)は、ハンディキャップを招き、患者のライフ・スタンダードを著しく悪化させる。他方、この寄生生物は、移植された人工装具(transplanted prosthesis)とも解釈できる。患者の生命維持や、社会生活維持に必要な場合には—例えば手術で損なわれた顔形を維持するための皮膚の—移植が推奨される。日本ではつい最近(1995年)、脳死をもって個人の死と認める、新たなガイドラインが導入され、こうした臓器移植(organ transplantation)を推進することとなった。皮膚の表面は自分だが、その下には他人の臓器が活動している、という異様な風景が、医学の名のもとに容認される法律環境が整えられた、といってよい。だがここには、切除(mutilation)と移植(transplantation)という、よく考えれば同居不可能なはずの矛盾した欲望が共存している。寄生獣を、取り除くべき癌であると同時に、移植されたプロステーシスとして描くことで、岩明のストーリーは、その抜群の映像的な効果もあいまって、医療倫理が患者の皮膚の下に隠そうとしていたこの曖昧な薄気味悪さ(Das Unheimliche)を暴き、外科的に扱われる臓器の所有権(propriety)への疑問を投げかけた、といえる。

2

実際この物語にあっては、もはやどちらがドナー(donner)でどちらがレシピエント(recipient)なのか、判然とは分らない。少年にとってみれば、彼の右手・右腕は寄生生物だが、それを取り去ることはできないのだし、寄生生物にとってみても、少年の頭脳は余分(superfluous)なのだが、自分は、宿主の少年の頭脳に支配された人間の身体に寄生しているのだ。両者に

とって、おたがいに不都合このうえない状況だが、しかし両者は少しずつ両者が相互に依存していることを納得してゆく。自分の宿主(host)がいかに自分にたいして敵対的(hostile)であるとはいえ、寄生した身分としてはこの宿主なしには、自分の生活がままならない。宿主にとっても事は同様で、いかに自分の右腕がしばしば言うことを聞かない(disobedient)であろうとも、だからといって右腕を失ってしまったら、これに劣らず不利な状態を招いてしまう。とはいえ、お互いの協力が必要だ、と頭で理解することと、実際にその協力がうまく行くかどうかは、別問題。このトラブルを悲喜劇的に描く場面で、変形自在な皮膚という形象が、文字ならぬ映像ならではの喚起力を伴って活性化される。

ふたつの異なったアイデンティティーが同一のひとつの人体に共存しているのだから、少年と怪物とのあいだでは、滑稽にして深刻な口論や諍いが、次々と発生する。右手を占拠する怪物は人間社会の仕組み百般を早くマスターしようと、読書に余念なく、またたく間に必要な知識と言葉のスキルを身につけてゆく。好奇心のかたまりのようなこの右手は、百科事典を読破し、その可塑性を活かして、挿絵にあったチキンの解剖学的組成まで模倣してみたりする。少年は、自分の右手の熱狂的な読書の後始末をさせられて文句を言う(Vol.1, p.45: なお、日本のコミックではコマは上から下へ、右から左へと流れてゆくのが原則だ)。

こうした場面の細部に、作者、岩明は、思いがけないほどの描写の才能を発揮する。例えば少年がそのガールフレンドに会うと、その右腕は突如驚張した巨大なファロスに変形する。寄生している右手は、少年のホルモン分泌に忠実に(faithfully)、というか気まぐれに(fancifully)反応したものらしい。ここで寄生獣は、海綿体の詰まった伸縮自在の皮膚からなる男性生殖器官の、いわば誇張された提喩(synecdoche)の役割を演じている。実際、寄生獣は人間の性的本能に興味があるのと同時に、宿主があまりにその潜在的配偶者にたいしておずおずとした態度を取るのにいらいらする。「人間の交尾が見られなかったのは残念だった。したいことをしないのは体に毒だぜ」と、右腕はその持ち主(?)に忠告する(Vol.1, pp.52-58)。そればかりか、右腕は、場所もあろうか公衆便所で、自分の宿主の生殖器を勃起させようと試みる。「あ、チョ、なにするんだ、よせ」と少年。水道の水をかけられた右腕は「冷たい」などと、やりあう。この対話(dialogue)、第三者から見れば、どう見ても気が触れた独り言(insane monologue)で、少年の学友たちはびっくりして気味悪がる。少年にとって恥ずべきことにも、自分の意思に反して強制された射精(ejaculation)ですら、公衆の面前で臆面もなく自慰(masturbation)に及んだもの、と勘違いされかねない

(Vol.1, p.45)。

そうこうするうちに、少年は右手にある種の親近感を持つにいたり、右手も自分のことをミギーと呼ばれることに同意する(ミギーはいうまでもなく右<rechts>を意味する。ちなみに、タマゴッチなる玩具が流行していたのも、本書刊行の頃だったはず)。ミギーもまた少年のペット扱いされることは拒絶しながらも、自分の意思で睡眠するあいだだけは、自分自身たる“右腕”のコマンド権(Rechts)を、少年に返還することに同意する。「疲れたので眠る。[君の右手を]大事に使えよ」などと宣言して、ミギーは眠ってしまうのだ(Vol.1, pp.46, 65-66)。試行錯誤(trial and error)のうちに、ミギーは自分の無配慮な行動で少年を無意味なトラブルに巻き込まないよう、学習してゆく。むやみな疑い(suspicion)を招かぬためには、ミギーは奇妙な行動を慎まなくてはならない。公衆の面前で、自分のからだや皮膚を、人間の解剖学的な限界以上に変形させてしまうことなど、問題外だ。一心同体のふたりの安全のためには、ミギーだけでなく少年もミギーの存在を、少年の家族からも隠しとおさなければならぬ。だが同時に、この奇妙な同居(cohabitation)を続けるうちに、少年は超人的な右腕の能力をもった自己、という自己認識をも形成してゆくことになる。

3

ここにみられるふたつのアイデンティティーの同居形態の発想源としては、もちろん、シャム双生児が思いうかぶ。このような奇形[freak]を話題として、一身にふたつの意思が同居した場合の葛藤を描く空想は、古くからある。日本でも江戸・徳川時代ならば、山東京伝の『一鉢分身扮接銀煙管』が、男女のシャム双生児の愛憎をコミックに描いているし(fig. 2)、萩尾望都の『半神』(1985年)は、美醜を分かちもつシャム双生児の姉妹が、分離されることで美醜の役割を転じて、かつて美であった片割れが醜へと変貌しながら死んでゆく。この作品は、野田秀樹と夢の遊眠社によって舞台にも乗せられ



fig. 2 山東京伝『一鉢分身扮接銀煙管』扉

た(1987年)。さらに萩尾の『イグアナの娘』(小学館, 1994年)は、その発展形として、姉妹の役割分担を、母子の愛憎に重ね合わせ、イグアナと人間との転生の物語として描いて行く。また「沼のほとりのパドルビー」の獣医、ジョン・ドリトル先生に従う、世界に一頭しかないプシュープリーユ(Pushmi-pullyus)は、日本では井伏鱒二によって「オシツオサレツ」と命名され、思慮深い双頭の動物として謙虚な活動を見せる。最近になって、より「進化」した——というのもこれは両方の頭で同時に言葉を発するからだ——オシツオサレツの生存が、堀江俊幸によって確認された(『図書新聞』1999年3月20日号)。佐々木マキ『ピンクの象を知らないか』(絵本館, 1998年)を参照されたい。ついでに言えば、双頭の鷲を紋章に戴いたオーストリア=ハンガリー二重帝国の崩壊が、民族共存の破滅と裏腹だったのも、図像学的(iconographical)な寓意の象徴的な意味を探るうえでは、意味深長といつてよい。

だがこうした先行例と、この岩明の物語が決定的に異なるのは、主人公たるこの寄生物と人類とのキメラ(chimera)が、あたかもその複数性を隠蔽することによって個体であるかのように振る舞うべき運命を授かっていることだ。フランス語には être dans la peau de qn. という表現があるが、まさに他者の皮膚の中に入り込むことで、その他者を演じきることが、ミギーにとつての「右腕」としての倒錯したアイデンティティーとなる。また、この一心同体、複数によって個体をなすという主人公の特性が——かれを、と呼ぶべきか、かれらを、と複数を用いるべきか、文法的にも困難を感じるほかないのだが——、『エイリアン(Alīan)』シリーズ[初期]を含む、多くのハリウッド・モンスターものの怪奇映画や空想物語からの本作品を画然と区別する。この意図的な非決定性(indeterminability)に関して、ここで三点の指摘が必要だろう。

まず、いわゆるドッペルゲンガー(Doppel-gänger)状況は、ここで新たな意味を担う。オスカー・ワイルドのジキル博士とハイド氏、あるいはエドガー・アラン・ポーの楕円形の肖像のように、一人の人格の裏表をなす、というのではなく、また萩尾望都のような、母娘、姉妹の美醜の対比というコンプレックスを演出するマトリックスとなるのでもなくて、ここでは分割不可能な個体(indivisible individual body)にふたつの独立したアイデンティティーが住まう。このふたつの異なったアイデンティティーは、しかし相互に依存的であつて、社会的にはあたかも分割不可能な個人(individual)であるかのように振る舞う(あるいは振る舞おうと、努力する)。公衆[パブリック]の前では、同一の皮膚のしたで、両者はあくまで一枚岩であるように見えねばならない。だが両者のプライベートな個(self)は、ふたつに分かたれている。ま

さに『引き裂かれた個 (*Divided Self*)』(R.D. Laing [レイン])だ。こうしてアイデンティティーというものの自明性 (self-evidence) は振れてしまい (blurred)、恒常的な葛藤の対象となる。

この葛藤を観察していると、こう哲学的な、あるいは精神医学的な問いを問わざるをえない。個人=非分割 (individual) と呼ばれる“我”なるものとは、いったい何なのか、と。個 (self) の一体性 (integrity) といわれるものは、果たして信じられているほどに自明 (self-evident) なものなのか、と。さらに、分裂した人格 (split personality) と呼ばれるものは、ほんとうに患者にとって克服すべき、精神病的な外傷 (psychotic traum) の結果に過ぎないのだろうか、と。ちなみに、19世紀末のヒステリーが今日では消滅したのにも似て、分裂症 (schizophrenia) という病名は、おそらく近い将来、医療の世界から消滅するだろう、との予測もある。

次に、ここで、時に日玉に化すパートナーと同居する少年という形象が、作者自身、少年の口を借りてふと漏らすように (Vol.5, p.57)、水木しげるの『ゲゲゲの鬼太郎』から着想を得ていることを指摘しておくのは、無駄ではあるまい。『寄生獣』での、主人公の少年とミギーの関係は、『ゲゲゲの鬼太郎』の主人公たる妖怪、鬼太郎少年と、その左目の眼窩に居候して、時々そこから出てくる、鬼太郎の父と信じられている日玉人間との関係を、なぞっている。発生学的に言えば、目という器官は、皮膚が体内に取り込まれることで形成される。だが、鬼太郎の父は、まさにこの発生学の過程を逆転したように、息子の眼窩から、ぼろりと出現する。また目がしばしば超自我 (Über-Ich) を司ることも、言うまでもない。ところが鬼太郎におけるこの父と子の依存関係は、個人の統合性 (integrity) と信じられている象徴的階層関係 (symbolic hierarchy) を裏切り、さらに、息子による父殺しという、オイディプス・コンプレックスを逆手にとったような倒錯した構造によって、支えられている。はたしてこの逆転——そしてここでの「母」の欠如——は、倫理的、道徳的な水準で、何を意味するのだろうか。

第三に、この物語は、恐怖科学空想もの (horror scientific fiction) という物語の枠組みを借りながら、西欧においてほとんど自明視されてきた衛生思想 (hygienics) の浄化への偏執に、根底的な疑問を突き付けている。すなわち寄生 (parasite) という現象は (映画では『エイリアン』初期や、『ターミネーター』シリーズなどに現われる侵入者のように)、もつぱら除去されるべき異物、排斥されるべき敵、絶対の悪、としては表象されていない。岩明の物語——(Bildungsroman)——では、寄生物はもはや主人公の個 (individuality) への脅威とは見なされず、むしろ個というものの自己認識や自己形成、人格完成に貢献するもの、として描かれる。興味深いことに、これ

は衛生学や免疫学における、寄生現象への最近の発見や仮説とも軌を一にした (coincide) 事態というべきだが、その前に確かめておきたいことが若干ある。

4

ここまでで、我々は十巻からなる物語のようやく第一巻の終わりに近づいたにすぎない。ここで物語全体の骨格を必要最低限、三点にわたって指摘しておこう。まず、寄生獣がやっかいな (troublesome) 理由といえば、それは主にかれらが新鮮な人間の肉を栄養とすることだ (同様の人肉食宇宙人が、肉屋や屠殺場の倉庫に人体をずらりと吊るす場面は、北米SFにもよくある設定だ)。たしかに初期のような衝撃的 (sensational) なミンチ人肉殺人事件は徐々に報道されなくなる。だが、その代わりに、理由不明の「蒸発」や理不尽な行方不明のケース (case) が報告されるようになる。寄生獣たちは、自分たちの食料確保が覚悟したように、より安全で賢い方法を学んでいたわけだ。だが、この表向きの「社会化」 (socialization) の裏では、人間捕獲 (human hunting) が、より隠微なかたちであいかわらず遂行されていた。

第二に寄生獣が人間界に広がるにつれ、目撃者がいやおうなく出現する。人間の肉体を捕食するためには、寄生獣たちは、その時だけは人間の皮膚を装った頭部の変装を止めて、それを猛獣じみた牙つきの大口に変形して、人肉を漁らなければならない。この変身を人間たちの目から完全に隠しきるのは不可能だった。ついに或る寄生獣の個体が、自分の本性を隠しおすのに失敗し、不注意にも目撃者の少女を殺害しようとする。ところが様子のおかしいことを悟っていた少女は、高校の化学実験室で、怪物と化した化け物 (!) に硝酸の入った瓶を投げ付ける。うっかり硝酸を飲み込んだ怪物はその頭脳——それはその皮膚全体に散在している——のコントロールを失い、なかば正気を失ったまま校舎のなかをさまよって、無意味な大量殺人を犯してしまう。この殺戮をくい止めるために、主人公の少年はミギー=右腕の助けを借り、ふたりは協力して大きな石を、この気の違った怪物の左胸にたたき込む。ミギーの怪力のおかげで、石は怪物の宿主の胸を貫通し、巨大な穴を空ける。怪物を殺害する最も有効な手段は、その寄生している人間宿主の心臓を破壊してしまうことだったわけだ。しかしこの出来事のために、怪物の死体はついに人間に捕獲されてしまい、怪物の實在に動かぬ証拠を提供してしまう。怪物の認知に、皮膚の与える感触がいかに決定的かも、作者の巧みなデッサンが示すとおりだ。とまれ、この事件を切っ掛けにして、この未確認にして危険きわまりない生物の秘密を解き明かすべく、密かに大規模な捜査網が敷かれることになる。

第三に、こうして少年とミギーとの立場が、事件の鍵

を握ることになる。少年とその右腕が、事件の真実を知る唯一の存在だからだ。一方で少年(およびそれに寄生したミギー)の存在は、そのほかの寄生獣たちから、自分たちの生き残りにとってはなほ危険なもの、と見なされるに至る。かれらの秘密を少年が暴くだけで、寄生獣たち全体の生存が危機に瀕することとなりかねないからだ。自分たちの安全確保のために「正常」(?)な寄生獣たちはこの、いわば突然変異(mutant)な個体(?)を始末しよう、との決定を下すに至る。だが他方で、人間側の警察にとってみても、少年は掛け替えのない重要参考人となる。こうして伸介者にはつきものの運命が主人公(たち)に到来することになる。かれ(ら)は利害にかかわる両側の当事者から危険分子としてチェックされる。あたかもイソップ物語の蝙蝠が動物の世界と鳥類の世界の双方から敵視されたのと同様、この「突然変異」の個体——なかば寄生獣にしてなかば人間という「ふたなり」——は、敵対する両方の陣営のあいだにあって、特権的だがリスクも大きな媒介役を演じる役回りだ(bisexuality に対する社会差別という現象と比較すべし)。こうして物語が進行するにつけ、少年の周囲の緊張感はいやましに高まってゆく。

5

だが、皮膚論を所望されているこの場で、この行き詰まるストーリーの顛末を聴衆に語り、その読書の楽しみを奪うのは、野暮というものだろう。その代わりに、以下、岩明均が物語の細部に仕込んでいたと思われるメッセージを、我々の論点である皮膚論にそって、いくつか検討してみたい。人間の皮膚を装う寄生物という存在について、さらに掘り下げてみよう。とりわけ寄生獣と人類との関係に関して、三点ほど指摘が必要だろう。

第一に、人類[ヒト]を捕食する習性。或る寄生獣は、自分が「人間を殺せ」という命令を受け取ったのは、自分が宿主となった人間の頭脳を侵略した瞬間だった、と回想する。その一方でミギーは、「この種(species) [人間] を食い殺せ」という感情、そんな「すさまじい怒り」は、人間の「脳を奪わなかった自分には存在しない」、と告白する(Vol.10, p.129)。読者もこのかん、ミギーは人間の肉体を食べたいなどという、いかなる空腹も必要も感じていないことを知らされている。宿主の少年がちゃんと食事をしているかぎり、ミギーは自分で捕食などする必要はなかったのだ(Vol.1, p.148)。つまり、人間の脳=頭部を奪取した寄生獣にだけ、種としての人類を抹殺せよ、という命令——あるいは本能——が宿ったことになる。

これ以上説明するとどくなるためか、著者は直接には何も語っていない。だが言外には、こう漏らしていることになる。つまり殺害の本能は寄生獣に遺伝的には刷

込まれておらず、それはあくまで寄生獣たちが漁った人間の脳髓から伝達されたのだ、と。とすれば寄生獣たちは、殺戮という自分たちには未知の本能を、いまや自分たちが捕食する資格を得た当の相手から植え付けてもらうがために、人間の脳髓に侵入するべくプログラムされていたことになる(もっとも第一巻では、誤って犬の頭部に寄生した個体が、犬を襲うという場面が描かれているのだが、これはイヌにも同種殺戮の本能がある、とすれば、矛盾はすまい)。つまり、人殺しが「肌合う」ようになるためには、まず人殺しを犯す必要があった、という訳だ。もちろん、殺害を目的として同種を殺害する生物は、人類[ヒト]に限られるわけではなく、高等霊長類には広くそうした事例が知られている。とはいえ、狩猟の開始とともに類人猿は人類となった、とする狩猟仮説も、自然人類学では知られている(マツ・カートミル、内田亮子訳『人はなぜ殺すか』新曜社)。そうした訳で、寄生獣という虚構は、殺害を自己目的としうる種としての人類、という事実を浮き彫りにするための工夫だったことになる。

第二に、寄生獣は、被造物としてはおかしなことに、生殖能力が欠如している(このあたり、原作者は連載開始当時には気づいていなかったのかも知れない)。寄生獣が宿主たる人間の頭脳を占有しているかぎり、その宿主(女性)が宿した子供は、人類の子供でしかない。寄生獣はその寄生する人類の遺伝子情報に介入することはできないわけだ。或る寄生獣はこれを奇異に思い、自分たちの存在理由(raison d'être)を問い直す。「わたしたちはどこから来たのか、わたしたちは何なのか、わたしたちはどこに行くのか」(Vol.7, p.228)。こう——ポール・ゴーギャンを気取って——自問した(宿主が)「女性」の寄生獣は、もうひとつの(宿主が)「男性」の個体と性交の実験をして、人類の子供を生もうと試みる(Vol.1, p.183)。だが当初は純然たる科学的実験だったはずのこの試みは、この「女性」寄生獣に、微妙な心理的影響を与えはじめる。いわば、「肌を許す」行為が、寄生獣に人間の肌合いを植え付けたわけだ。

作者は、この女性寄生獣にと或る女子大での講義を聴講させる(Vol.7)。その教室では老教授が、ドーキンスの利己遺伝子にかんする仮説を解説しているのだが、思えば遺伝子操作には介入できない寄生獣は、その限りでは、種としての人類にとって敵対する存在とは言えないだろう。それどころかドーキンス流の枠組みに立って考えてみれば、人類の遺伝子は、通常、配偶体としての人体に寄生しているのみならず、脳髓を乗っ取った寄生獣すらも、自らの寄生媒体として利用している、と見ることすら可能なわけだ。

第三に、両者の共生(symbiosis)が進行するにつれ、少年とミギーも、お互いにその気質(mentality)に変化

を期する。物語第二巻では、少年の心臓が、少年の母親に変装した寄生獣の攻撃によって破壊される。宿主の生命を助けるために、ミギーは自分の身体を分割し、自分の体の一部を材料にして、損傷した宿主の少年の心臓を修繕する。この操作＝手術(operation)によって少年は命を取り留めるが、同時に超人的な運動能力を獲得する。ところがこれとは裏腹に、ミギーは右腕としては30パーセントほど萎縮してしまい、あまつさえ自分の意志とは無関係に日に四時間は眠り込む、という人間同様の体質になってしまう。加えて、これまで一貫して冷血・冷酷一点張りだったミギーの推論(reasoning)は、なにかしら人間的なタッチ(human touch)を帯びるようになってくる。右腕ミギーにも「人肌」が宿りはじめるわけだ。

こうして寄生獣たちに、人間的な「肌」のぬめりが出てくる様子は、物語のなかの対話にさりげなく、しかし巧みに(subtle)織り込まれる。一例だけあげておこう。ミギー：「人間でいうところの「情」という感覚は寄生生物には育たない」。少年：「知ってるよ」。ミギー：「それから……わたしが危険にさらすようなことはしないでほしい(……)わたしが言いたいことがわかったのかい? ……自分の右手が人[少年のガールフレンド]を切り刻むところなんて見たくないだろうってことなんだが……」少年：「それ……脅かしてるわけ?」ミギー：「ウン」少年[怒って]：「ほんっと情のかけらもない!!」ミギー：「だってそうだってば」。このミギーの最後の台詞(「だってそうだってば」)はその意味しているところ[内容]を[表現が]裏切っている。自分は情というものに欠けている、と告白することそのものが、ミギーの少年にたいする情を、さらにはありとある被造物にたいするミギーの情の証しとなっているからだ(Vol.5, pp.86-87)。こうした肌触り、はたしてドイツ語への翻訳でうまく伝わるだろうか?

6

さて、寄生獣たちが人類との共生(symbiosis)を模索しているあいだにも、公安警察や自衛隊の特殊部隊は、これら寄生獣を絶滅(exterminate)すべく、組織的な工作(manoeuvre)を仕掛けてくる。某市市役所が寄生獣たちの大本営(headquarter)と突き止めた特殊部隊は、これを包囲するに至る。麻薬中毒患者が銃をもって立てこもったとの口実のもと、市庁舎を包囲した特殊部隊は、特設したX線透視装置で割り出した寄生獣を、その場でひとつひとつ処刑してゆく、という強硬手段にでる。人類であれば頭蓋骨が写るはずのところで、寄生獣ならば頭部が影になる。肌の下に隠された内実が、X線によって見破られる、というわけだ。殺害の方法は、石を心臓にぶち込むことの応用で、1Bショット・ガンの弾

丸を胸部に打ち込んで、瞬時に宿主の心臓を破壊する、という方式。X線装置が、肌の下に隠された謎を透視してはじめて事の真実が明らかになる。X線こそが、西欧近代の解剖学的方法論と、皮膚＝表層にたいする不信を代弁する比喩となっているが、そうした解剖学的定査(scanning)への信頼の態度を、作者はひそかに批判の対象としている。そのことは、この作戦が敗れて、結局市長舎を包囲した特殊部隊の隊員が、全員皆殺しにされてしまう、という顛末からも明らかだろう。

寄生獣の頭目と目された市長は、死に臨んで最後の演説を行なう。そこには、作者がもつとも分かりやすい水準で伝達したかった(あるいは陳腐なものとして暗に批判したかった)メッセージが要約されている。すなわち、ほかならぬ人類こそが、この地球という惑星最悪の寄生生物であることを、人類は自覚すべきである、というわけだ。人類は豚肉や鶏肉を提供する豚や鶏たちにとって、人類こそがかれらの「寄生獣」であることは、あまりに明白な事実だ。とはいえ、その事実を人類は、あたかも人類がその家畜たちと共生していると解釈することで、いわばごまかしてきた(Vol.6, p.131)。「寄生獣」という虚構、それは家畜の思想を疑問視し、「寄生獣としての人類」という真実を明らかにするための仕掛けであった。そして寄生獣の大量殺戮は、結果として、人類の執拗な異物恐怖と残酷な殺戮本能をも暴露してしまう。

7

しかし、ここでは皮膚という話題に注目して、この物語から我々が引き出すことのできる、なおふたつの別の教訓に注目しておきたい。それらはいずれもどうしたわけか(incidentally)、寄生獣によってなされた犠牲的行為、というかたちで、物語られる要素となる。

最初に、例の妊娠——分娩実験をした「女性」の寄生獣。人類の赤ん坊を生んだ「彼女」は、徐々に人間の「情」を理解するようになる。主人公の少年の安否を気遣うガールフレンドを前にして、この寄生獣は、こうため息をつく。「彼のことが心配なのね。うらやましい……」と。敢えて散文的に言い直せば、こういうことだろう。「あなたの愛情ある気遣いが自分にもあったら、と望むのは、嫉妬というものだろうか」(Vol.8, p.18)。この先遠からず「彼女」は警察官の集中砲火を甘んじて受けて死ぬことになるが、その際、「彼女」はなぜか母性本能を発揮してしまい、「自分」の赤ん坊を救うために、自分の身体を犠牲にする。胸に抱いた赤子を銃弾から守るために、彼女は自分の髪——これも寄生獣の皮膚の一部だが——を変形させて、その覆いのなかに赤子を包んでしまう(fig.3)。この場面で作者が、キリストの教えの図像にある、慈悲のマリア(Madonna misericordia)を応用していることは、あまりに明白だろう

う (fig.4)。ここで寄生獣の皮膚は、聖母が信徒たちを保護するマントへと変貌して、人類の赤子を匿うに至る。こうして寄生と保護との関係が転倒し、吸血鬼は聖母となって死を迎える。寄生生物だったはずの存在が、ここでは赤子を包む子宮 (uterus) の隠喩へと置き換えられる。この逆転は、まさにこの、皮膚の、宗教的ともいってよい変容 (transfiguration) を通じて達成されるわけである。

ふたつめに、ミギーもまた、少年が生き延びる (survive) ために、自らを犠牲にする。寄生獣を一匹一匹と殺戮してゆくことなら、あるいは不可能ではなかっただろう。しかしこうした絶滅作戦に対抗するために、今述べた「女性」の寄生獣は、自分の最期の前に、五体の寄生獣の合体からなる、無敵 (invincible) な「個体」を作製していた。この敵が、市長舎の攻防で、人間側の特殊部隊を全滅させるわけだが、少年とミギーにとっても、この無敵の相手からの攻撃に耐えることは不可能だった。この最初から勝ち目のない強敵との最後の一騎打ちで、ミギーは自分を少年から切り離す、という意想不到的戦術を編みだす。敵はその「無敵」を、五つの個体を一個の「頭」の独裁によって力で統御することに負っていた。これに対しミギーは、個人 (individual) の分割可能性 (dividability)、という、自分と少年の特殊な関係に、最後の勝負を懸けた。この無敵の合体生物は、今は亡きソビエト連邦や、また力づくで統合した国家 (United States/States united by force) の比喩と見ることも可能だろう (ちなみに、最近、*Dis-united States of America* という本が、ちょっとした評判を取った)。だがこの策略をもってしても敵を倒すことはできず、ミギーは次善の策として、少年にたいし、蜥蜴の尻尾よろしく自分を見殺しにして逃亡することを強制する。少年にとって自分の右腕の喪失は、いわば自分の己 (self) の内なる他者の喪失をも意味していた。こうして個と集合との弁証法の

謎を突き付けたあたりで、物語は急速に悲観的 (pessimistic) な色調を帯びるにいたる。

8

このあと、最終巻にいかなるどんでん返しや揺り返しの顛末が待っているか、それは原著者との知恵比べ、読者ひとりひとりのお楽しみに取っておこう。その替わりに指摘しておきたいのは、ここで皮膚の領有を巡って、両立しえない倫理観の対立が描かれていることだ。かたや個というものの掛け替えのなさ (irreplaceable individual) を説く考え (「ひとりひとりの命は地球よりも重たい」)。他方には生態系 (ecological system) 全体の均衡を優先させる全体論 (wholistic) な世界観。後者からみれば今や人類が地球の毒であり、寄生獣がこの毒を中和するための必要な治療薬 (remedy) だ、とする解釈も可能だろう (Vol. 3, p.204; Vol.10, p.10, p.142)。だが例の妊娠した寄生獣は、はたして自分の腹にいる胎児が毒なのだろうか、と自問する。作者自身、脱稿のちの後書きで、このジレンマをいかにして乗り越えるかに苦しんだことを告白している。だがこの対立する倫理観の一方に安易に軍配をあげるかわりに、寄生獣という虚構を利用して、両者のせめぎあいの可能性を徹底して追求できたゆえに、著者は共生 (symbiosis) のうえにたゆたう東の間の結節点たる「己」のありかたの不安定さを、豊かに分節 (articulate) することに成功した。著者自身白状するとおり、最初は短編の学園ホラーもので終わらせる予定が、途中から登場——人物ならぬ——生物たちが勝手に生命をもって動き始め、收拾がつかなくなった、という暴走事故も、作者には幸いした。

同じころベスト・セラーとなった『笑う回虫』(講談社、1994年)で、著者藤田紘一郎は、興味ある仮説を展開した。寄生虫学者 (parasitologist) 藤田博士によれば、ほんの30年前には日本人の多くが腸内に飼っていた寄



fig. 3 岩明均『寄生獣』第9巻、講談社、p.85



fig. 4 「慈悲の聖母」図像を応用した墓碑の例、サン・ミニアート・アル・モンテの墓地、フィレンツェ、筆者撮影

生虫、回虫(ascarid)が、実は人々を花粉症(hay fever provoked by cryptomeria pollen)やアトピー性皮膚炎から保護していたことになる。幼いころ回虫に寄生されていた子供は回虫の分泌物にたいして抗原抗体反応を起こし、immunoglobulin E (IgE)を生成する。これらのIgEのほとんどは活性がなく、好塩基球(basophile)や肥満細胞(mastocyte)と呼ばれる白血球(leukocyte)の表面を覆っている。この場合、スギ花粉や粉兵ダニ(dog ticks)といった抗原との接触であらたにIgEが体内で作られても、それらは白血球と結びつかず、アレルギーを引き起こす化学物質は作られない。

ところが戦後、日本の衛生環境が「改善」され回虫が駆除されたことが、皮肉にもアトピー性皮膚炎や、花粉症に苦しむ過敏な皮膚を作りだしてしまった訳である。またこれもほぼ時期を同じくして、免疫学(immunology)の多田富雄は、これまたベスト・セラーになった『免疫の意味論』(青土社、1994年)で、衛生学の発達と抗生物質(anti-biotics)の発達がアレルギーの蔓延を引き起こしたことを、読書人たちに納得させた。環境にありふれて存在していたバクテリアや抗原(antigen)が減少してしまったために、免疫機構はその通常の敵を見失ってしまった。抗原との共生が微妙な均衡を取っていた環境は、戦後急速に破壊されてしまった。その代わりに、先進諸国を中心として、前例を見ないほどの無菌(aseptic)ないし滅菌を施された皮膚環境が広がってしまった。このバクテリオ嫌い(bacterio-phobia)の強迫観念——とりわけドイツと日本に著しく、抗菌グッズの流行や「お父さんは臭い」が、その発現形態といえるだろう——のなかで、もはや抗原との共生はありえず、免疫機構はとるに足りない環境の変化にも、大袈裟な拒絶、過剰な反応の兆候を示すようになった。

寄生虫から自由(parasite-free)でありたいという衛生強迫症は、けっして民族浄化の強迫とも無縁ではない。どちらも不純物の駆逐を自己目的とするからである。それが『危険な純粋さ(La Pureté dangereuse)』である、という限りではベルナル・アンリ・レヴィは間違っていない(立花英裕訳、紀伊国屋書店、1996年)。だがさらに、天敵(natural enemy)や寄生物を根絶やし(exterminate)にしてしまうと、その先には自己免疫症(auto-immune disease)という自己破壊の悪夢が待ち受けている。近代ヨーロッパでユダヤ人やポーランド人が民族浄化というテロルの犠牲者となったのにも似て、いまやイスラームや儒教世界が、また場合によっては日本やアジア圏が、世界の楽園(paradise)ならぬ、寄生虫(parasite)扱いされかねない状況も生まれている。だが肌荒れを防ぐには、寄生虫や細菌との共生が必要不可欠だ。岩明均の『寄生獣』は、今日の世界に蔓延しつつある浄化症候に対して警告する寓意として(も)、重要な作

品のひとつである。皮膚を巡る美学的考察と並んで、また皮膚の政治学をも提唱したいと考える。

英語版：京都にて1997年初夏に執筆—日本語訳：パリにて1998年初夏、6月10日に脱稿。

編集者註：文中の英語挿入は、横文字というParasiteとの共生のため著者の要望により残した。

皮膚の想像力 The Faces of Skin

編集：

佐藤直樹（国立西洋美術館主任研究官）

クリストフ・ガイスマール＝ブランダイ（インデペンデント・キルライター）

イルメラ・日地谷＝キルシュネライト（ドイツ＝日本研究所所長）

翻訳：

相澤啓一

巖原順子

桑折千恵子

装幀：

輿語秀樹

制作：

印象社

発行：

国立西洋美術館

©2001 The National Museum of Western Art, Tokyo

ISBN 4-906536-19-0 C3071

[附記]

この報告書のドイツ語版『Gesichter der Haut』（ISBN 3861091577）は、ドイツの出版社 Stroemfeld Verlag より2001年に出版の予定です。